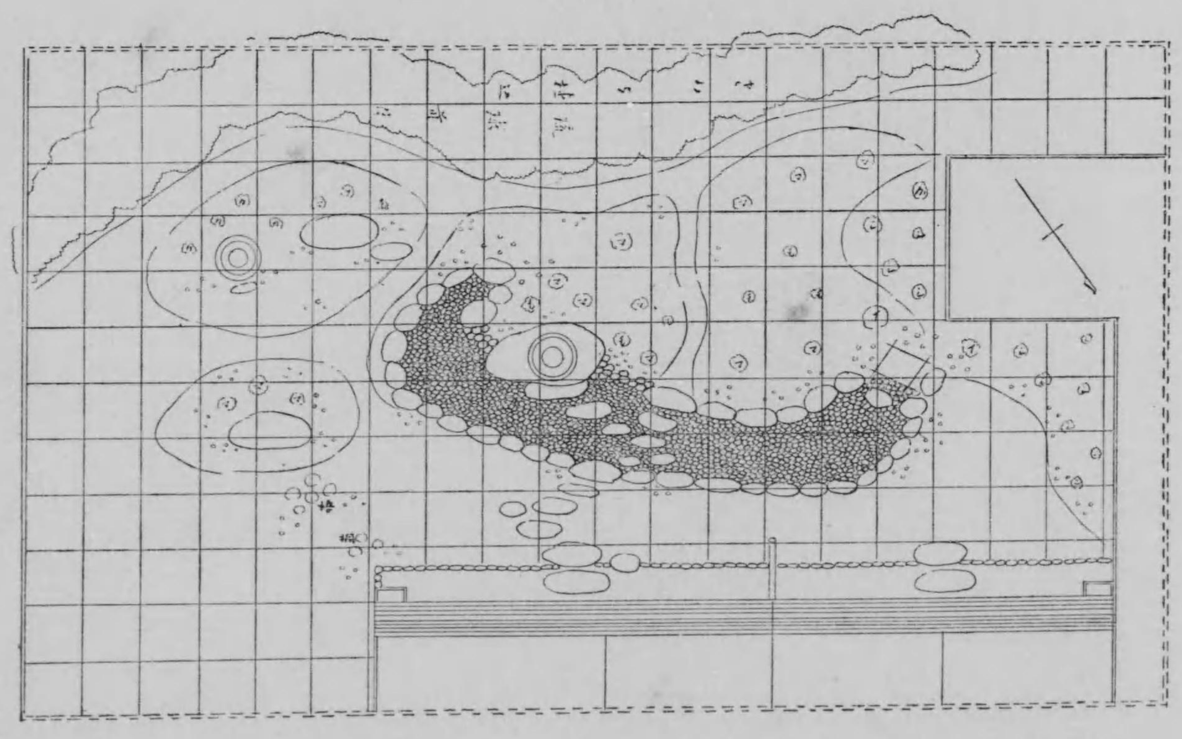
第三十二圖　優美な庭　（長野櫻枝町西澤氏邸）

在來本鞍馬石自然形內法四尺の見事極まる井筒に依つて、枯山水を寫し出したのである。而して對岸吐口近くに据えた頂平扁な巨石は、井筒と相俟つて之も頗る見事なので、其の下一石を枕にうつろとして、上へ雪見燈籠を据え、左右土留石の容易になじみよいのを得なかつた結果、單にこの一部分丈けは栗丸太の亂杭を用ゐた。井筒の後方及び左側は、八ッ手三株にて圍ひ、在來高さ三間餘の糸檜葉一本を井筒の右側後に、更に二間餘の一本を右側前に落し、右方の藏前廊下から藏の左側へかけて、一間半二間二間半の椎十一本を植込み、其後端に在來高さ三間餘の槲一本をあしらつた。斯くして其の前方卽ち對岸へは。松高さ二間二間半餘のを五本と、一間半乃至二間の楓樹三本とを散らした。又『さわたり』から向ふ通路の在方燈籠の後へは、高さ三間半二間半の松五本と、二間內外の楓樹三本を植込んだ。最も對岸は一體に土を盛つて、少しく高い地克とした。

椽前雨落際は正しく玉石で卷き、內部は小砂利の洗出とし、中間には高さ七尺幅六尺五寸の黑穗の鐵砲袖垣を設け、左側の角へは高さ二間二間半三間三間半內外の梧桐を五本三本と寄せた。而して其の前方へ三尺高の紫貴船石の見事なよい形のを一箇建て、高さ二間二間半の松三本を背後に落し、更に其の後方右寄りに前の貴船よりは稍々低い雅致な大小二石を以つて前者を受け、其の背後へは二間餘の松二本と、一間餘の楓樹一本とをあしらつた。この二景石の左寄りへ、前の松間をすかして見え隱れに七尺高の赤石形石燈籠を据え、其の後方へ高さ三間二間半の鎌倉檜葉四本を植込んだ。以上の背後の境界には、在來の高さ四間三間半三間の『さわら』三十五本を模樣に植え、三四尺高の琉球つつじ卽ち淀川十八株を一體に前付けとした。斯くして貴船の景石を用ゐた一嶋のみ、態笹に依つて其の下を締め、他は全部下草には皐月を散らしたのである。泉流の『さわたり』から別れて、前平扁に後部肉付厚い一大石の下をうつろとした、枕石は、點火石を兼ねて、之れへ渡る二石のあつかひ等、其の一部に就いては少なからぬ注意と工夫を凝らした。泉流中へは一面に小丸太石を敷詰めた。



第三十二圖（其一）　嚴島　大願寺周圍　縮尺百分ノ一（其二）周圍は次頁に示す

第三十三圖　野趣味な庭　（東京大森岡田氏邸）

前方及び左側は生垣にて限られ、吉野杉の高さ二間半三間内外のを八十五本模様に植込み、たゞ前方の右寄りへ高さ二間二間半のかぶつた形のよい楓樹を三本二本と寄せた。吉野杉の植込み折曲り角へ、間口二間半、奥行き二間の喫茶亭を造つた。内部は總てを地面に見て、其の三方へ何れも高さ一尺八寸、幅二尺五寸の腰掛けを取付け、柱は全部杉丸太を用ゐ、腰掛上端の壁付高さ二尺、中一尺幅に湊紙の腰張、其の上高さ三尺の窓（四方共）に障子を嵌め、其上二尺五寸壁付け（壁は全部聚樂）とし、右方は連子窓とした。屋根茅葺端口の厚さ六寸五分、屋根裏葭簀張、棰は赤松丸太と竹とを六寸間に、小舞は女竹を二本列べて藤蔓で搔いた。外部の腰は窓際迄杉皮を張り横竹で押へ、玉石の挿込とした。入口は幅四尺、其の向ふに爐を置き、自在を掛けて湯わかしに便じ、中央に五尺に三尺の臺を据え、臺の中一尺に取除き自由に丸竹を置き、其下部水落しを取附けて、茶碗などを洗ひすゝぐに便じた。

亭の右方前に井戸を穿ち、井筒を置いて井筒前を造り、六尺の石燈籠を建て、井戸へは『はね』釣瓶を仕掛け、石燈籠下井筒前一體の下草は、木賊で模様取り風情に濃淡に散した。而して亭の右側前へ、高さ三間餘亭上を覆ひかぶつた松一本を落いて、左方の松を受けしめ、二間二間半高のよい形の古木の梅四本三本と寄植えた。家屋の雨落際は玉石にて亂置に卷き、折曲の角へは幅六尺の黒穗の鐵砲袖垣を斜に取付け、業平竹一株をあしらつた。左側は四ツ目垣にて限り、其外部へ紅樓を稍々濃く植え、其の前に大小の景石二箇を据えて、態笹の植えつぶし一島を取り、其の左前方へ高さ四間半三間餘の松を亭へ寄せて三本、少し前へ離して一本と落した。次でこの二景石を受けて右方へ更に一景石を据え、其の左右端へ山錦木所謂『まゆみ』の高さ三四五尺、形態よろしきものを三本四本と添え、同じく態笹濃厚に一嶋を取つた。次で右側の座敷前にも、亦同じく態笹を少し横長に植えつぶした一嶋を取つた。要するに茶亭に依つて井戸には『はね』釣瓶を用ゐ、『はね』釣瓶に依つて只管野趣味を充分に發揮せしむべく、さては杉の植込み、梅の寄植え、木賊、態笹等と選び來つたのである。若し夫れ今少し廣い餘地があつたなら、尙ほ幾層の趣を添えしめ得たらうに。

第三十三圖（其一）野趣味な庭　平面圖　縮尺　百分ノ一

（其二）配景圖は次葉に示す

第三十四圖　淡雅な庭　（東京芝巴町元多田氏邸）

左側及び向の境界は建仁寺垣にて圍ひ、右側は板塀で其の外部は玄關前となつて居る。好みに依つて一條の流れを取り、水道から水を分つて絶えず潺々の流れを觀るべく、吐口は土管の暗渠で建仁寺垣外の溝に落した。泉源の可なり大石の後には八ツ手四株を植ゑて覆ひ茂らせ、右岸は木賊を稍々濃厚風情にあしらひ、左岸亦豊後笹卽ち「おかめ」笹を同じく濃厚模様に植込んだ。斯くて吐口留の前石の右側に輕く木賊を添え、左側は後石と共に八ツ手二株にて押へ、椎高さ二間半三間物十五本を建仁寺垣にならふて參差態よく配植した。而してこの椎の中へ在來三間半に四間高の公孫樹二本と、矢張在來の高さ約二間有餘前にかぶつて面白い百日紅一本を圖の位置に割込んだ。吐口留石の後方には雪見燈籠を据えて、八ツ手の蔭、椎の下部、豊後笹の下草に依つて趣を取り、且つ泉源の上部左方へ五重の塔を建て、これも八ツ手の葉越し、百日紅の下部、椎と檜を負ふて奥に深く、只管森嚴の樣を豊に感ぜしむべく工夫した。

前面は又同じく高さ二間半三間の檜十五本を體よく植え、其の中央邊に在來高さ二間餘、幹太き形整ふた榊一本を落して、前付ケには泉源の八ツ手續きに、一體に八ツ手八株を植えて引締めた。こゝに八ツ手を選んだのは、彼の木賊と豊後笹との纖弱を補ふて、且つ大模樣に見せしむべく注意したので、若し之を他の小葉物などに依つたなら、慥かに失敗であつたと信ずる。同時に隨分大膽な手法と思ふのである。右側家屋の先端の角へは、大は三間高の松一本と、二間二間半の松を鼎足形に寄せ、其の右側へ仙臺形八尺の石燈籠を据え、更に右方へ楓樹の高さ一間半位のを、同じく三本を落し、其の手前に青木二株、他は皐月五株を散らした。此一島は左方の重き主景を受けて、輕からぬやう、又不調和ならぬやう、前後の稍々廣い空間美と相俟つて統一すべく注意した。次で左側の座敷と正面の座敷との折曲り前へは、特に袖垣を設くるのせいこましいきを思ひ、高さ五尺程、締つて見事なよい青木一株を落した。而して家屋の左角へはこれ亦在來の柘榴高さ二間餘、形の面白いのを一本植え、柊南天の然るべきを六本程あしらつた。但し飛石際には却つて煩雜を慮つて、何等下草類を更に用ゐなかつた。

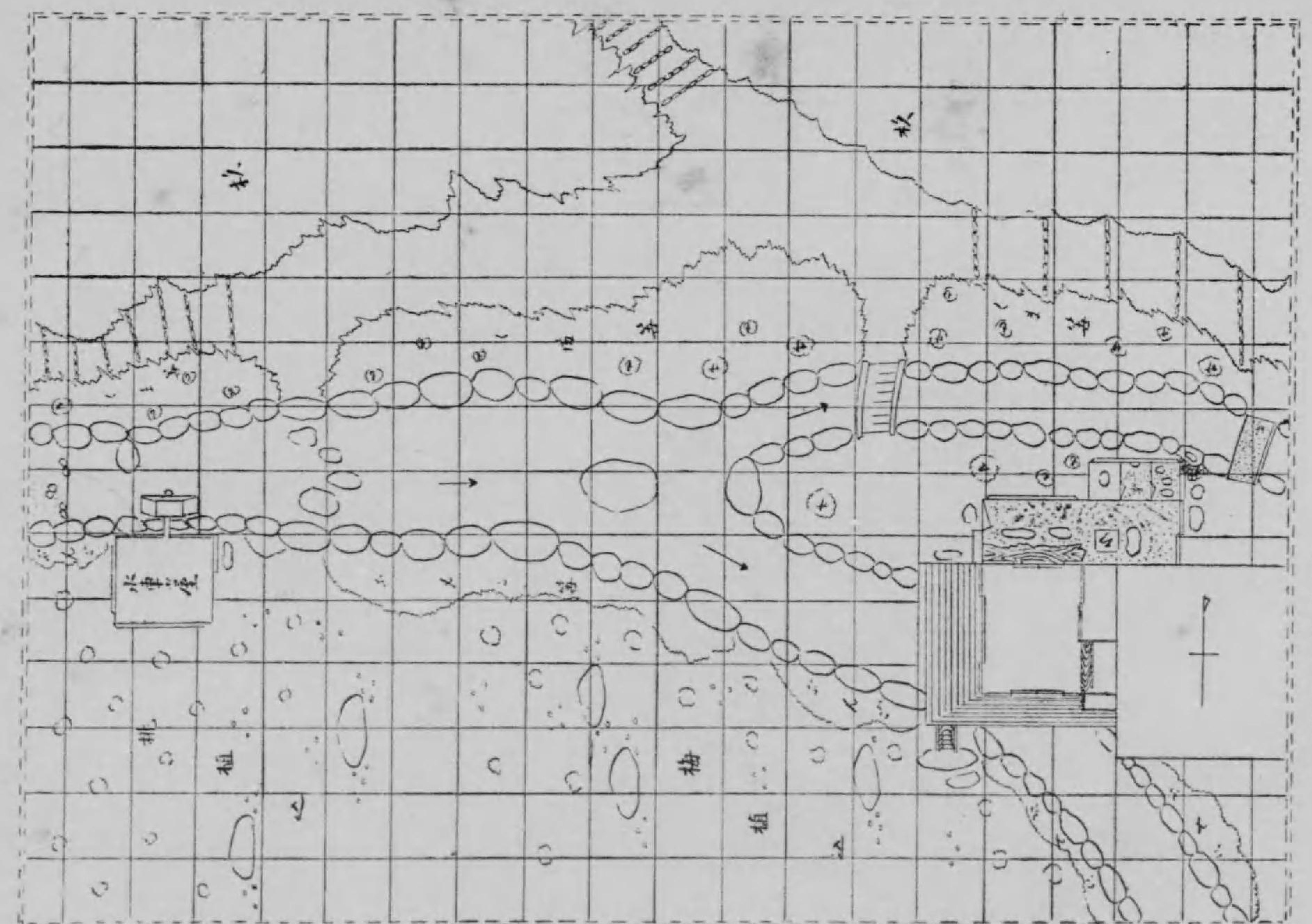
第三十四圖（其一）淡雅な庭　平面圖　縮尺　五十分ノ一

（其二）配景圖は次葉に示す

第三十五圖　雄渾な庭　（小田原田邊邸ノ一部）

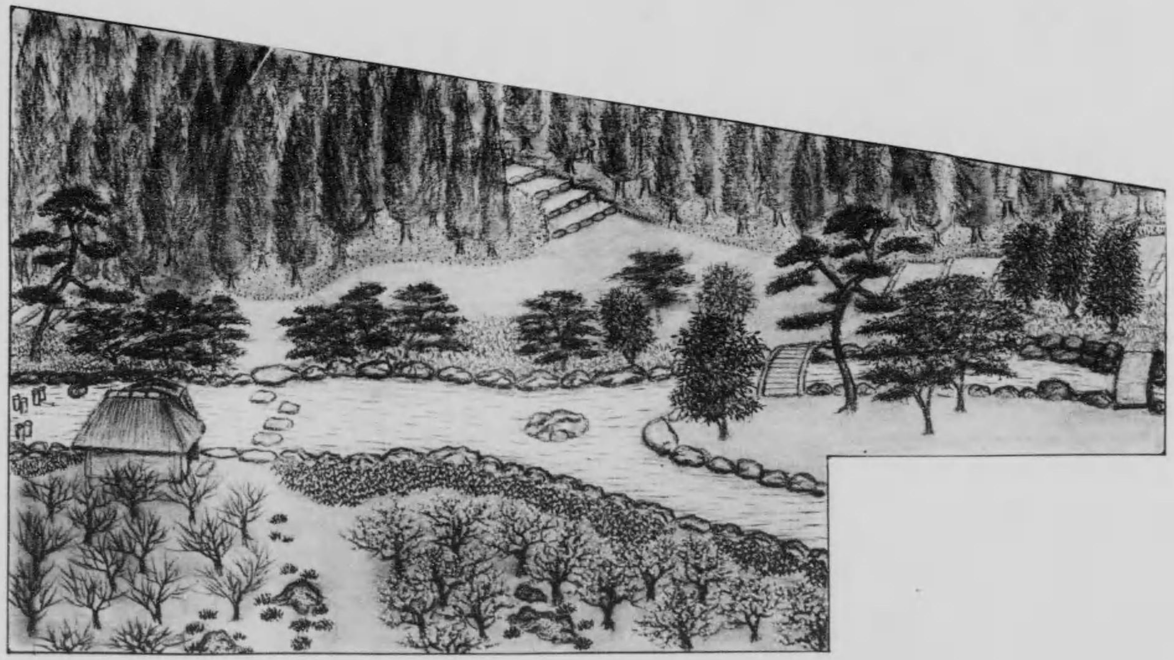
北は老杉の林を麓として山岳をなし、南は生垣外に狹い村路を隔てゝ又丘山となり、西は巨大の諸木生ひ茂つて深い溪谷を埋めて居る。東は尙ほ廣い地を餘して別に本屋があり、此處は其の一部の離家で、豊富な水に依つて前端に水車を仕掛け、常に米を舂いて一家の用に便ぜしめた。水車前には埃除けの杭を打ち、次で水勢を加ふべき一石をあしらひ、『さわたり』を兼ねて水力を少しくたわめしめ、水の分岐を整へるべく一大石を河中に置いた。水車小屋は茅葺とし、其の三方面へは大小の桃十五本を植えて見え隠れに、二景石をあしらつて趣を取つた。手前は家の左側後から彼の桃に迫つて、之亦大小古木の梅同く十五本を風情に植込み、其の間に三景石を配し、この河畔は全部豊後笹に依つて濃く模様取り、下草は總て山榊を以てした。右岸は前端に高さ四間餘の松一本を落して水車及び小屋を覆はしめ、三間二間半の楓樹を寄せ、更に其の手前にも同じ高さのを三本、又其の手前にも三間餘の楓樹二本、後者は水分石上を、前者は路上にかぶらせ之れを左右に三間内外の在來本榊の古木二本を植えた。支流へは土橋を架け、其の下手へ二間半高の榊一本に、二間高の楓樹二本をあしらひ、次の花崗石橋の右側へ一間半二間一間の榊三本を配つて、以上樹木下は總て熊笹を濃厚面白く植込んだ。島の突出部へは古木の低い一間有餘の形態よき榊一本を植え、屋の右側入口際へ、三間餘の松一本を落して屋上を覆はせ、二間に一間半の楓樹二本を添えて水上にかぶせた。

家屋六疊は予の設計より成り、上部は戸袋に並んで開き入口一間幅に通し、下部は入口二枚の『まいらし』戸とし、船底の踏板左側に爐を切つた。室の前方は潮地卽ち『せん』の濡椽一間幅に、左側同しく三尺幅とし、高さ一尺の輕い手摺を取付け、椽から階段にて左岸の方へ下り得るやうにした。下部入口の右側河に枕んで雪隱を設け、其の手水鉢は岸石を兼ねて自然形のものを用ゐ、鉢前は單に程よき大さの丸太石を前石の前に置いたまゝで、只管趣を取り、雪隱への入口には、繩すだれを掛けた。この室に隣れる家屋は、炊事場と湯殿丈けにて、支流は繞つて本流と合し、尙ほ本屋邊に種々模樣取れて、門外遙に村内に流れて居るのである。



第三十五圖 (其一) 壯渾な庭 平面圖 縮尺 百分ノ一

(其二)配景圖は次葉に示す



（に）燈籠と手水鉢

第三十六圖　古燈籠と手水鉢　（其ノ一）

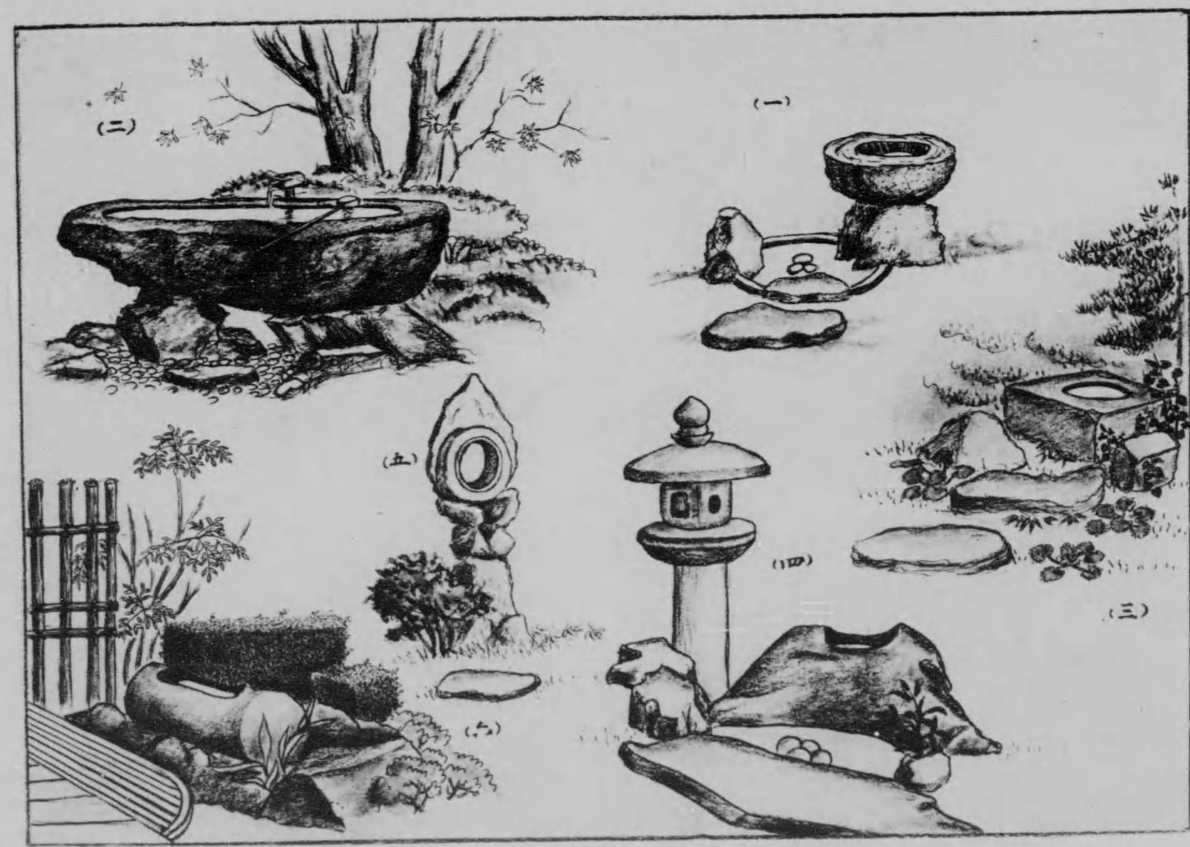
嘗に『新訂日本庭造圖面百種及其說明』にも、有名な石燈籠や手水鉢を多く揭げたが、茲に其の補足として猶ほ左の種類を選拔した。（一）は京都酬恩寺卽ち一休寺にある俗稱底拔け手水鉢にて、外徑二尺一寸、內徑一尺一寸五分、高さ八寸。（二）は同栗田口靑蓮院の茶亭に据ゑられ、一文字の手水鉢と唱へ、長さ八尺、幅一尺七寸、成二尺、梅と小さな紅葉と皐月とが添えられて居る。（三）は同相國寺の塔中、慈照院の茶亭に在つて、雪の下と皐月と小金松があしらわれてある。（四）は同金閣寺所謂鹿苑寺の夕佳亭なる富士形の手水鉢。（五）は同大德寺孤蓬庵の有名な太鼓形石燈籠で、其の高さ僅に四尺五寸。（六）は同妙法院の奥書院前にある手水鉢にて、大理石で造られ、高さ三尺九寸、圓徑一尺七寸五分、其の石質と形態とに顧みて、刈込みの下草を以てしたのは面白い。

第三十七圖　古燈籠と名手水鉢　（其ノ二）

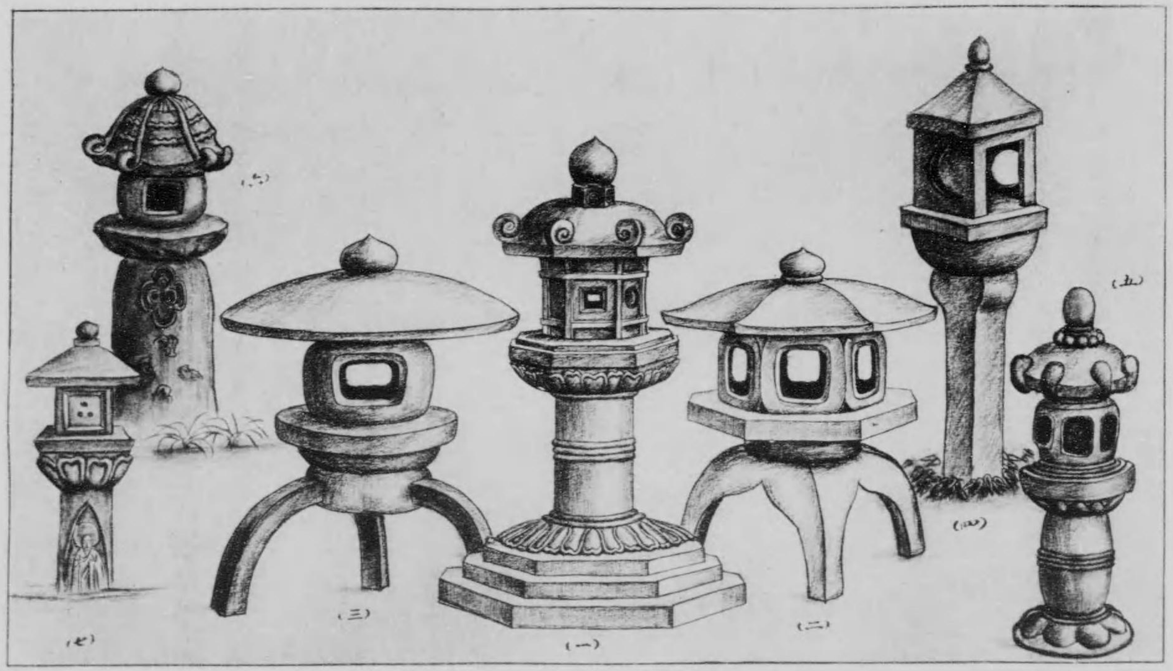
（一）は京都大德寺孤蓬庵忘筌の間、前の古燈籠と有名な露結の手水鉢である。（二）は同く孤蓬庵茶室前の布泉の手水鉢で、鉢の徑一尺九寸、成一尺五寸、古雅謂ふべからざる趣の物。（三）は同栗田靑蓮院茶室前の手水鉢、鉢の幅底部にて二尺、高さ一尺二寸、輕く馬酔木の小老樹と、八ツ手一株とをあしらわれてある。（四）は同金閣寺夕佳亭茶室水屋前の椽前に据えられてある物。（五）は同高臺寺の圓德院茶室前に在る檜垣の手水鉢と稱へ、花崗石の鑿切仕上で、兩脚の下端五寸明き、兩脚の上出五寸五分、前面のしゃくりを除く三方は上下共に五寸幅、海となる部分で高さ一尺八寸、横幅亦一尺八寸、海の縱幅一尺五分、深さ五寸。（六）は同孤蓬庵にある石燈籠で、高さ二尺三寸。

第三十八圖　古燈籠　（其一）

（一）は京都南禪寺の一種の大燈籠。（二）亦一種の雪見燈籠。（三）は丸雪見燈籠（四）は利休好掘建燈籠で、其の柱の前面に立佛像の彫刻があつて、裏面に『錦上一の二階書字、下に四梵字、側面には『岩松光心風來入』の七階書字が彫まれてある。（五）は水戸常盤公園內に在る古燈籠にて、（六）は東京松浦家愛藏の古燈籠、總高さ六尺四寸三分。（七）は東京故赤星彌之介氏所藏、一種の長暗堂形古燈籠である。


(二)
(一)
(五)
(四)
(三)
(六)

露結



第三十九圖　古　燈　籠　（其ノ二）

（一）は奈良南法華寺に存する一種の古燈籠にして、總高さ八尺二寸四分、其の柱の表に『奉造立燈台大永七年七月七日施主信憲』と楷書で刻んである。（二）は同じく當麻寺の古燈籠、總高さ七尺四寸五分。（三）は同じく榮山寺の古燈籠、總高さ九尺二寸。（四）は京都北野神社に存在せる織部形石燈籠にて、總高さ七尺五分、其の火袋の右には圓形、左には半圓形を透彫として ある。（五）は奈良放光寺の古燈籠、總高さ七尺二寸九分、其の柱の紋樣の下に『天文十七年戊甲五月十八日勸進沙門實清敬白』と楷書で刻まれてある。

第四十圖　古　燈　籠　（其ノ三）

（一）は名古屋伏見町某庭に在る一種の雪見形古燈籠。（二）は笠形古燈籠。（三）は山寺利休形。（四）は名古屋長谷川太兵衛氏の所有、塔形石燈籠にて、德川源敬公の志水氏に賜ひしものと。（五）は京都泉涌寺の雪見燈籠である。

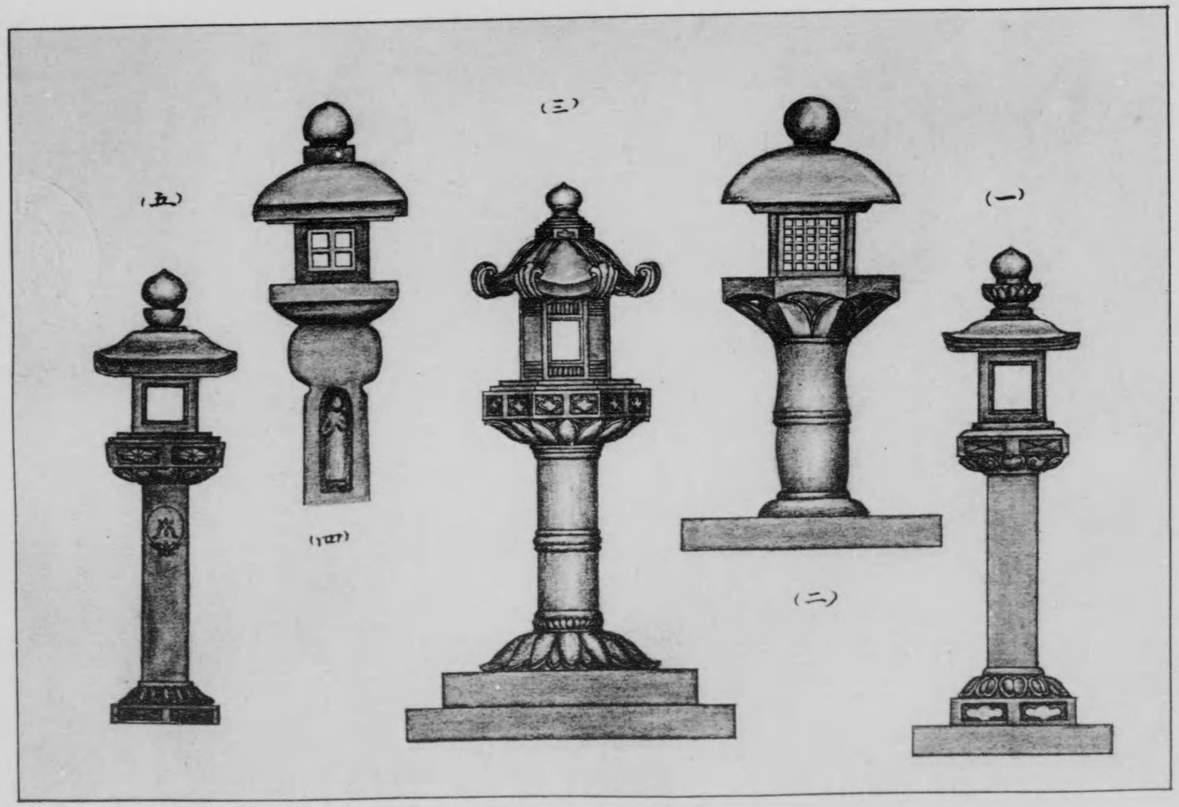
第四十一圖　古　燈　籠　（其ノ四）

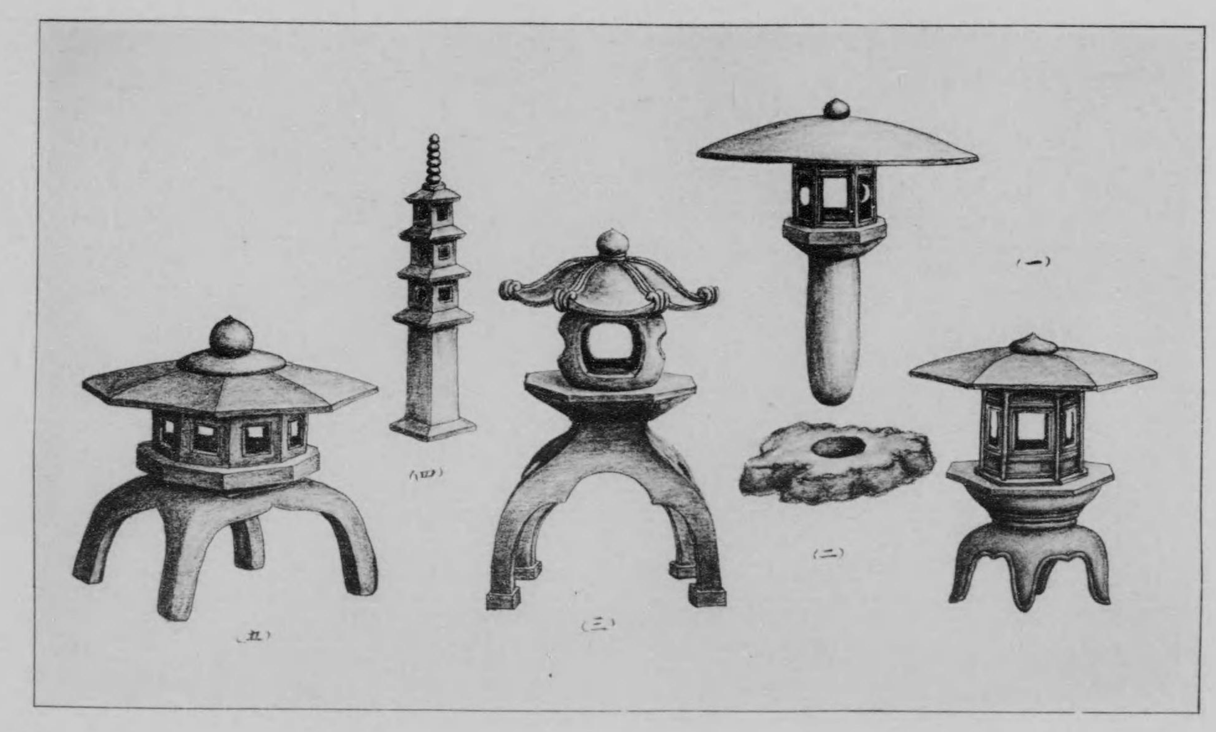
（一）は淺草六地藏の古燈籠、總高さ六尺二寸。（二）は上野博物館の庭內に存じ、元ト大久保餘丁町なる大久保加賀守忠職の邸園中に在つたもの、慶長二年八月十六日淨心坊外十餘僧の交名を其の柱に彫刻し、庚申待供養の爲に造立せりと云ふ。但俗化燈籠と稱ふるは、何の故にや。（三）は日光瀧尾神社の古燈籠。（四）は嚴島社にあつて、平判官康賴の寄進にかゝり、其の臺石は今埋れて見えぬ。（五）は一種の織部形古燈籠である。

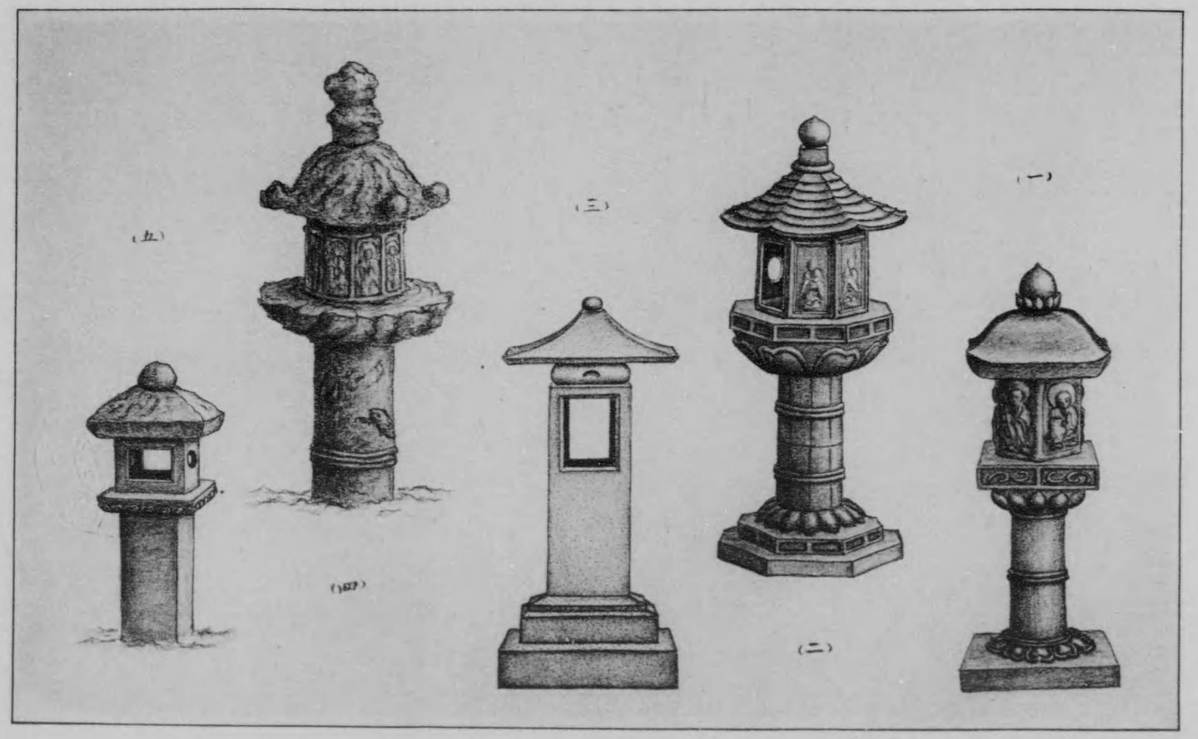
雪見形即ち雪見燈籠の名稱に就き、曾て故久保田米僊氏曰く、之れを雪見燈籠と云ふは無意味である。多分浮見燈籠の間違ひならん乎。浮見燈籠と云へば、近江八景中堅田の浮見堂を形取つたものたることと明白である。昔は浮見形の燈籠と稱へたるを傳訛して、雪見燈籠と呼ぶに至りしならん云々と。こゝ面白い說にて、恐らくしかあるべきを信ず。

湖上春來似畫圖一　亂峰圍繞水平鋪
松排山面千重翠　月點波心一顆珠
碧毯綠頭抽早稻　青羅帶展新蒲一
來能拋得杭州去　一半勾留是此湖

おのづから夜のまの花の露落て
　しばふにかをる春の曙
都にてかすみと見しは山ざとを
　包める梅の匂ひなり兎


(五)
(四)
(三)
(二)
(一)




(五)
(三)
(一)
(四)
(二)

（ほ）洋風園

第四十二圖　洋風園の一例　（東京下荻窪田中氏邸）（其一）

在來四五寸大の玉石が澤山にあつたゆゑ、室前の雨降際を正しく卷いて、內部を『セメント』塗とし、其の他左側の通路際、各花壇の前面並に側面も共に正格に卷いた。通路は何れも二尺幅としたが、獨り芝生の後部は稍々廣く四尺餘、圓路は二尺五寸とした。圓の中心には高さ五尺、其の前後左右には三尺高の生茂つて率直な美しい金松五本を植ゑ、周圍眞圓形、又其の周圍半圓形の內部へは、一面に通路を几帳面に措いて高鹿芝を伏せた。花壇の角々へ、大體揃ふた青伊吹の丸物一株あてをあしらひ、特に室の左側『ベランダ』際には同じく伊吹玉四株を並行に植ゑた。正面及び左側の境界は檜の刈込生垣で、右側は其の外部に蔬菜園花樹園等廣く存在せば、輕く二尺五寸高の四ツ目垣を取り、蔦蔓の類を繁く這はせた。

右側は二間半高の揃ふた形の檜十四本を櫛比に植ゑ、正面は少し高い同く檜十本に、一間半餘のもの七本を其の間々に落して稍々濃厚にあつかつた。左側の檜と檜の間の前付は正しく『どうだん』の丸物十一株を植ゑ、又其の『どうだん』と『どうだん』の間へ沉丁花を狹んだ。而して其の後方前に幅六尺、長さ約五間の綠蔭棚を設け、これへは蔓花物を這す事とした。前面の檜下には『つげ』の丸物九株を整然と落し、左側をかけて正面壇內の餘地は、或は最も低い四季折々の草花、乃至は矢張芝伏せとする。右側は高さ三間內外の獨逸唐櫟十五本を、充分に手入れを加え、濃く枝を巧みに組合はせて、前付には形麗しい霧島躑躅と皐月とを交互に植込んだ。

第四十三圖　洋風園の一例　（東京市外下荻窪田中氏邸）（其二）

室前斜方形の外邊を芝伏せ、其の內方を小砂利敷、更に其の內方を又芝伏せとして、其の中へ何れも多行松三本、前方の一本は稍々高く三尺位、手前の二本は少しく低く二尺五六寸位なのを鼎足形に植ゑた。最も其の形態の正肅なるを貴ぶが故に、芝、砂利の周圍及び通路緣は、何れも一直線に宛ら裁切つたやうに、些の出沒等を許さぬ。同時に彼の多行松も樹姿一樣に、下枝茂き麗しいものに依つた。而して通路の各屈折點へ、之れも揃ふた二尺高の高野槇七本を植ゑた。玄關への通ひは玉石留の砂利敷とし、其の左側に三間高の多行松三本と、家屋の角へ高さ二間二間半の『ヒマラ

ヤシーダ』三本を寄せた。右側も同じく三尺高の多行松五本を通ひに添はしめ、其の間に體よく勝手への通行に妨げのないやう間隔を措いて、前面へは高さ二間半の檜四本と、且つ之れが間々と前右端とへ、同じく檜の一丈位なのを六本を植込んだ。四周の境界は全部檜の刈込の生垣である。

左側の境界際へは高さ二間の倭雜檜葉十三本を正しく楕比形に一直線に植ゑ、正面へは同じく高さ二間餘の椎七本、右側も亦同高さの椎六本を植込んだ。特に倭雜檜葉は下枝ある率直なものを選び、椎は前付があれば、能く樹冠を整へて下枝を顯みなんだ。而して其の前付けは下枝の充分な一丈内外の木穀や木犀をなじみ取り塗付けに混同し用ゐた。元來洋風園には雅味な樹種よりは、美麗に整ふた形の樹木が調和上頗る宜しいので、夫れには自然的の鎌倉檜葉や『ヒマラヤシーダ』や金松や技巧的の丸物造りがよいのである。併し經費の制肘等に於て、兎角思ふに任せ得ぬ場合が多ければ、夫れだけ工夫と技術に依つて、出來得る限りの缺陷を補はねばならぬは、強ち洋風園にのみ限らぬが、技巧を專一とする結果、隨分材料に困難を感ずる事が洋風園に多いのである。斯くして全部の下草は丸物の皐月と『つげ』とを交互に前面へ植ゑ、其の中の空間へは四季折り〳〵の低い草花を植込むやうに取扱ふた。

第四十四圖　洋風園の一例　（大連嶺前屯長谷川氏邸）（其三）

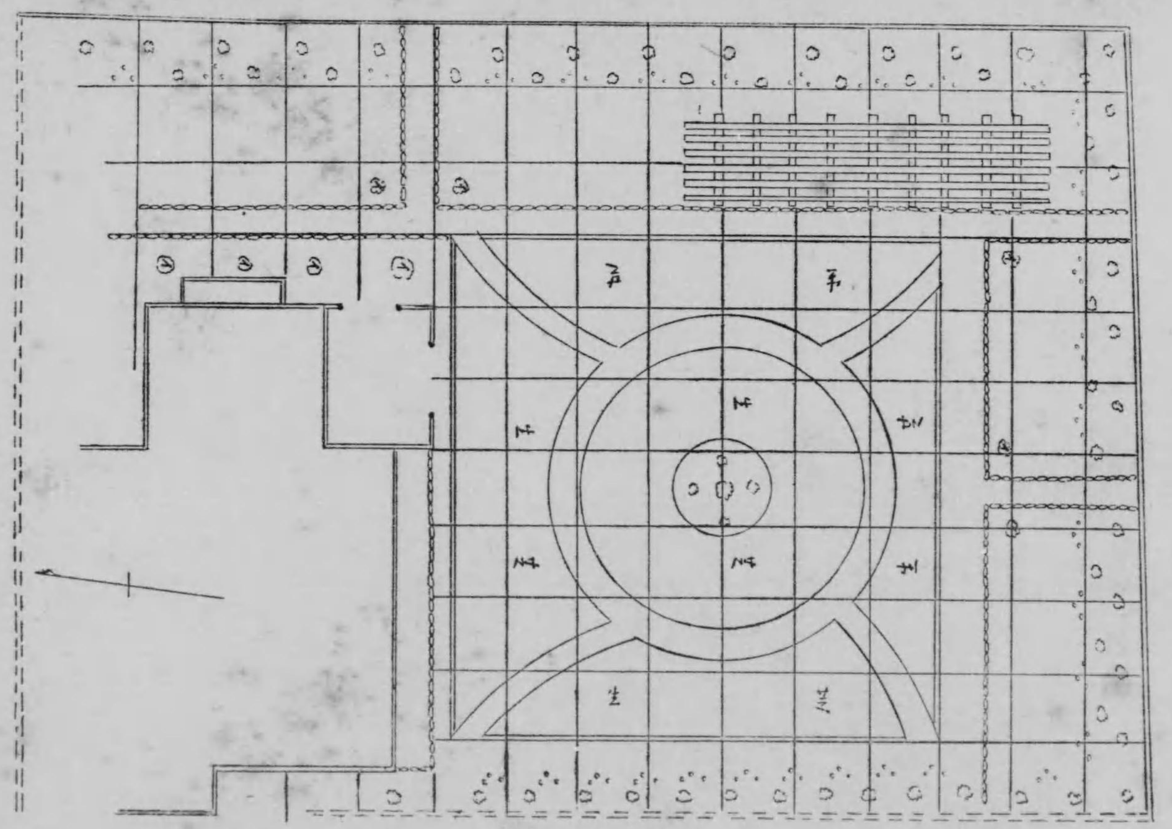
邸前の道路は門の右側際から坂をなし、其の境界の見切で約七尺の勾配となつて居る。前には幅一尺五寸位の溝を通じてあるゆゑ。これへ石の橋を架した。門柱は石製高さ八尺、左右は腰二尺『けんち』の石積みとし、右側境界際に至つては七尺高の石積みとなり、其の上へ圖の如き造りの木棚高さ三尺なるを取付け、全部白色の『ペンキ』塗とした。右側は同じく三尺高の板塀とし、左側は平地迄板塀夫れから玄關の横手をかけ、折曲つて屋後は絶壁の斷崖となつて、何等の圍ひを要せぬ。何分滿洲に於ては常緑種樹に乏しいのみでなく、觀賞樹木卽ち庭木を初め下草としても頗る其の類が少ない。唯兒手栢許りは隨分獲易いのと、又隨分立派な良いのがある。されば門の左右及び兩側面へは、高さ三間半揃ひの麗しい兒手栢を二十本、右側平地上には稍々低い二間半位のを十二本と植込んだ。

階段の左右には小さい低い『ぼけ』を風情に植ゑて强調を和げ、又其の左右の傾斜面へは、一體に芝を張り、在來の高きは五尺、低きは一二三尺

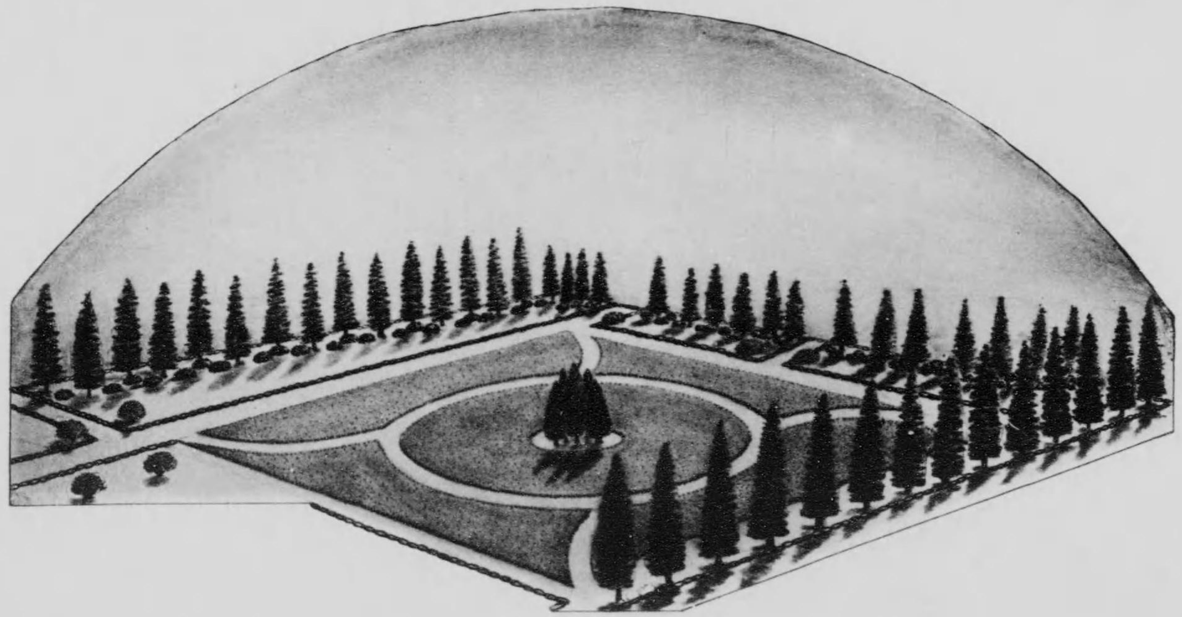
生ひ茂つた滿洲黑松の宛然多行松やうな形せるを計十二本散らした。最も丈け高きは兒手柏の植込みへ寄せ、低い物を前に出して其の趣を取り、平地と傾斜の際へは一直線に『しもつけ』を並植した。玄關際と斜に屋角へ、高さ四間餘の『にせあかしや』の見事なのを一本あて落して、屋角の力へは『さんざし』の三尺高なのを二株あしらひ、次で前面の窓際と『ベランダ』左角へ高さ五間近くの『しなのき』一本づゝに、錦木を添えて植込んだ。

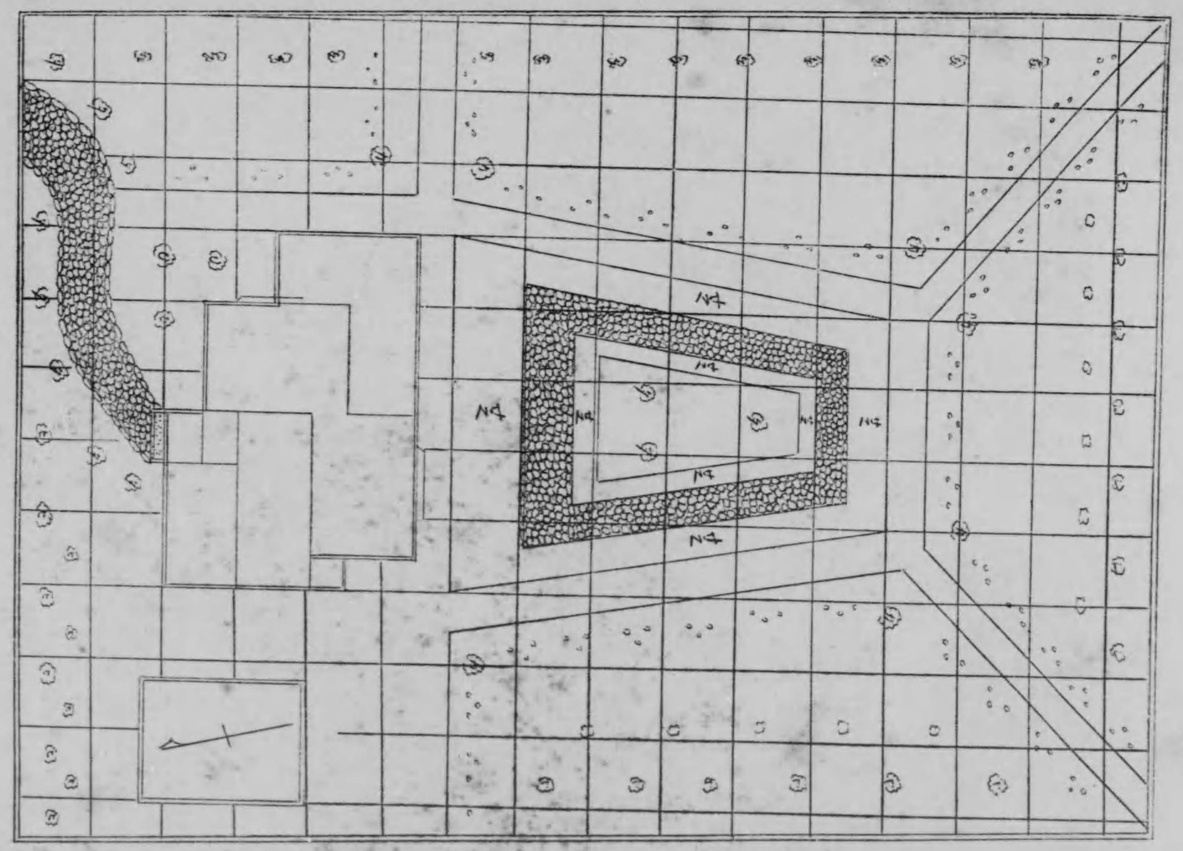
又西北面の角へは三間餘の樺柳（ヒヤウリウ）三本を寄せ、更に西南の角へは二間有餘の夾竹桃同じく三本に、小庭櫻の三四五尺なるを五株添えた。而して其の前面に幅二間、長さ五間の花壇を設け、圖の如き形肰に切石で周緣を圍ふた。花壇用の花卉は敢て豐富と謂ふ程ではないが、可なりに種類が獲易い。先づ球根には水仙、藥用種には翁草『こがねばな』、『さるびや』、紫苑、『ちきたりす』、觀賞種には朝貟、『えぞ』菊、『おしろいばな』、『きんせん花』、雞頭、葉雞頭、『こすもす』、錢葵、『ひまはり』、百日草、『けし』、『ひなげし』、鳳仙花、松葉牡丹、小田卷、女郎花、『かんな』、菊、金魚草、桔梗、『ぎぼうし』、『さんけいぎく』、車百合、『きすげ』、『けまん草』、櫻草、芍藥、『じやこうなでしこ』、『せんのう』、『だりや』、『たちあふひ』、朝鮮野菊、庭藤、萩、濱菊、姫百合、藤袴、佛蘭西菊、辨慶草、松葉百合、『みそ萩』等があつて、氣候の關係上何れも內地物に比ぶれば一體に丈け低く、特に其の葉其の花の至つて小さくして更に變らず、申わけ的に咲き出づる樣は、却つて大ひに可憐の趣があつて面白い。

序に果樹としては梅は少いが、杏が多い。『ゆすらうめ』も往々に見る。梨子、桃は最も豐富に『ぐみ』、『すぐり』は至る所にある。其の他の樹種には海棠、樺柳、夾竹桃、小手まり、『しもつけ』の大小、錦木、花すわう、藤、『ぼけ』大小、『さんざし』大小、小庭櫻、『べにうつぎ』、『べんばなにんどう』、『からたにうつぎ』、『くさにんじん』木、等は乏しくない。又生垣用としては『いぼた』、生垣若くは丸物造には『こたばこ』、『いわうつぎ』、『はなすぎ』、『えぞなるかまど』、『はしどい』、丁香、『こうらいにはふぢ』などはよい物である、櫻は大木がない。皆內地から渡つたもので、苗木は育つが少し大なる物は容易に發育せぬ。竹類、笹類、皐月類、八ツ手、靑木、椎、樫、木穀等は遂に見なかつた。併し安奉沿線には大程の種類がある。

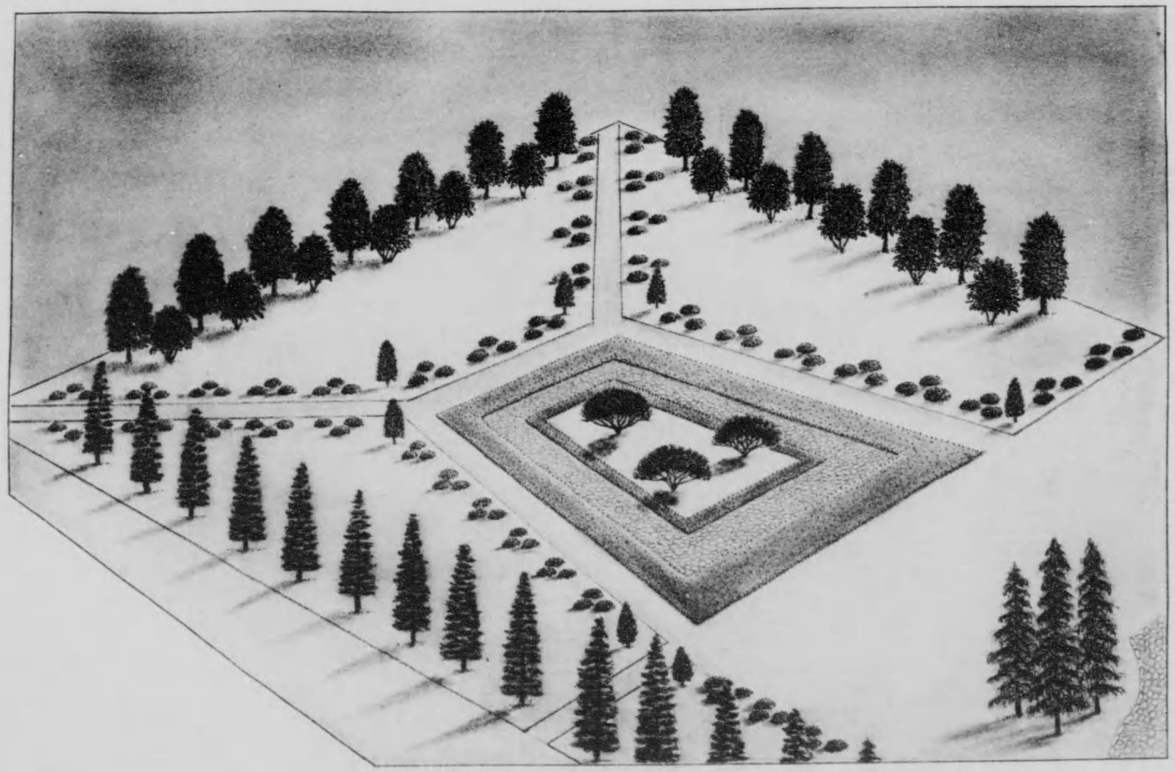


第四十二圖（其一）平面圖　縮尺百分ノ一（其二）屋根平面圖は次頁に掲ぐ





第四十三圖（其一）井　眞　國　寺同國　藤　八　百分の一（其二）圖案は圖案に基く



第四十四圖　洋風園の一例　平面圖　縮尺　百分ノ一　（配景圖省略）

大正拾五年四月廿日印刷
大正拾五年四月廿五日發行

庭の造り方圖解奥附
正價金八圓五十錢

著作者　杉本文太郎
發行兼印刷者　株式會社　建築書院
右代表者　今津源右衛門
畫者　甲斐喜美
題簽　武田霞洞
玻璃版印刷　東京市神田區錦町三丁目三番地　藤本錦陽堂
圖版印刷　東京市京橋區木挽町一丁目十四番地　鶯見活版所
說明印刷　東京市本所區北新町九十八番地　文化印刷株式會社
裝釘　東京市神田區三河町三丁目貳番地　市村製本所

著作權所有

發行所　東京市神田區錦町三丁目貳番地
工業圖書專門出版　株式會社　建築書院
振替口座東京九四一八番
電話神田九二七番

◉唯一の國粋的日本建築書出づ

伊藤虎三先生著

數寄家建築圖案

各輯　正價　參圓五十錢
送料　金貳十參錢

各輯同斷

第壹輯（目次）　玄關（二圖）玄關內部（二圖）床之間（三圖）椽側（一圖）二階窓濡椽（一圖）土間雪隱前（一圖）外に以上の平面圖付說明書十葉

第貳輯（目次）　門（一圖）玄關（一圖）玄關內部（一圖）床の間（二圖）階段（一圖）手摺（一圖）窓（一圖）緣側（一圖）外に以上の平面圖付說明十葉

第參輯（目次）　入口（一圖）露地門（一圖）小間（一圖）掃出窓（一圖）窓（一圖）書齋（一圖）露臺と八ツ橋（一圖）障子と下窓（一圖）欄間と屏障（一圖）欄間と板壁（一圖）外に以上の平面圖付說明書十葉

第四輯續刊第五輯にて（完結）全部は本圖五十葉說明五十葉合計百葉五帙となる

伊藤先生は帝室技藝員故伊藤平左衞門翁の息であつて、純日本建築家として嘖々たる令名がある。然かも丹精の技に長する點に於ては工業界の第一人者である。

純日本趣味の建築それは日本人のみが持つ特殊の手法であつて世界に誇り得る最も大なるものであらう、然るに其國粹的建築中の精華たる數寄家建築の書に至ては、技と筆と相俟たなければ出來ぬ爲め殆んど公にされたものがない。

本輯は何人も追從し能はざる獨特の圖案にして建築物に配するに、自然の林泉又は室內調度を描き、一目其高雅なる風韻を感受し得る稀有の逸品にして、加ふるに各圖每に平面圖と使用材料の說明を附し懇切を極めたものである。

江湖の縉紳、茶道花道の各位には無上の伴侶となるべく一般建築家は勿論旅館、割烹業、集會席、庭園師等には絕好の參考として必ず每輯を期待せらるゝであらう。

工學博士　伊藤忠太先生閲

前宮內省內匠寮奉職
金子建築設計所長　金子清吉先生著

日本建築雜作圖案

菊判美本全參冊
每卷紙數價格不同

上卷　床の部　大正十五年四月上旬發行
中卷　棚の部　同　六月中發行
下卷　羽目繰形、書院、天井、欄間、花狹間の部　同　九月中發行
門、塀、駒寄、各種繪樣、雜の部

弊社が義に發行したる日本住宅雜作圖案五百種は震災に依り原版を燒失したるにより之を絕版とし、更に著者に請ふて切實緊要なる雜作圖案のみを網羅し、著者と出版者と協力して非常なる努力の下に成れるもの、本書は實に雜作圖案の大集成にして、弊社が天下一品を以て誇る所の實用的良著なり、今や漸く此大出版の公表を爲し得るの機運に到着せるは弊社の一大欣快とするところ、希くは久しく渴望の諸君卒先申込を賜はらん事を。

◎本書は全部完成の上一卷として發表すべき計畫なりしが、斯ては非常に高價のものとなり、購求に不便なるを以て、分冊發賣の法を採り、所要の部分のみを安價に需め得らるゝやう順次に發刊する事としたり。

423
214

終